

# 西真寺 寺報

令和二年 春号

住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

コロナウイルス感染の影響で、安倍首相が、2月末から2週間の行動自粛を要請する直前に、当山の新年会が開催されました。

今年は駐車場工事に関して、懇志金の協力をお願いする中での開催でしたので、法話や落語を行わず、お金を掛けず、私によるお経の練習と「いのち」の講座をさせて頂きました。

例年よりお金をかけない割に、二十数名の参加があり、大変有難く、有意義な時間を過ごさせて頂きました事に感謝申し上げます。

この新年会以降、様々な行事が中止になり、小中高等学校も休校になった訳です。私の周辺でも、私の恩師ケネス田中武蔵野大学名誉教授を招いた新潟での公開講座や、長男の県立高校理科連合主催のアメリカ研修も中止になりました。

講座の為の根回しや準備、調整の過程、長男の選抜試験突破の為の精進努力に対する「自力無功」の思いは、大変心苦しく、尽きることはありません。

しかしながら、今後必ずや、この機縁が一つのはたらきとなり、生かせる日が訪れ、人生に無駄なことは一つもないと思える日が来ると信じて、歩み続けるのみです。

元来、思い通りになる人生など有るはずは無く、思い通りにならない自らの人生を、何とか思い通りにしようとして、苦しみが生まれると示した釈尊の教えが身に沁みます。南無阿弥陀仏 釋直徳

## ■影を内に観るか外に観るか⑤

### 4. 「投影の引き戻し」自覚者の言葉

歴史上、自分の内なる影を投射した対象から引き戻す、換言すれば自らの影、死の影を受け入れることで、先覚者たちは真実に目覚め、己の自然なる世界観にあるいのちに還ることを体現しているのです。ユングはこの「投影の引き戻し」について、次のように述べています。

人は光の像をイメージすることによってではなく、暗い側面を意識化することによって啓発されるようになるのである。しかし、後者の手続きは不愉快なものであるので、一般にはそうされないのである（『自己実現の心理学』）

イザナギは神であり、「人間の神化」に相当しますが、この投影の引き戻しである「神の人間化」に当たる作業は、仏教の内観道であり、浄土真宗の「見調べ」という技法から発展した、心理療法における「内観法」となり実践法として引き継がれています。

内観道を歩んだ親鸞の示す煩惱とは、煩惱不浄具足と表現されるように穢悪の側面があります。実際のインドのサンスクリット語では、煩惱のことをクレーシャといい、「こころの穢れ、悪い心のはたらき」と示されています。

一方で「もう一人の私、内なる妨害者」とする意味もあり、ユングの概念である「影」と同義語になるのです。業は行いである必然を指し、縁は偶然なるめぐりあいを意味するので、もともと人間は、防衛本能が顕わになると、攻撃的傾向を持ち、この傾向が皿の器とするならば、さまざまなめぐり合わせにより、この皿を受け皿とする条件が載せられれば、千人殺す悪人になるかもしれません。人間は条件次第

で、人を殺す「影」を根本に持つ生き物なのです。私たちは、死ぬまでこの煩惱は祓うことはできず、この内なる影と生涯を通じて戦うしかないのです。

人は誰も、自我に目覚め、己の内なる深淵をのぞきこんだその日から、負の部分である影との戦いを始めます。それは否定しようにも否定しえない自分の影の存在を認め、それから目をそむけるのではなく、しかと目を見開いてその影とむかいあおうとする戦いであり、さらにその影を己の中にとりこんで、光の部分だけでなくこの影の部分にもよき発露の道を与えてやろうとする戦いです。困難な戦いですが、おそらくはそれを戦いぬいて初めて私たちの内なる平衡は保たれ、全き人間になることができるでしょう。

『影との戦い』ルীগウイン訳者あとがき…太字筆者)

我々は、英雄や理想となる光のみを外に求め続け、思い通りにならない迷いの人生を歩み、貪欲・瞋恚・愚痴(むさぼり、怒り、愚かさ…三毒)を繰り返し、一方では死の影とは他人事で、穢れた対象として排除し、死を忘れるようにして生きてきました。挙句の果て、死の直前に「こんなはずじゃなかった」として人生を悲嘆するのです。

ユングと親鸞の場合、自分に対する期待を放棄する―自分に頼む心を投げ捨てる―という精神的な死を経て、影(穢悪)と共に人生を歩み続けることで、弁証法的な変革から成長を遂げていることが明らかなのです。

ここで言う精神的な死とは、自我の崩壊、「自力無功」を指し、生きること、光のみを前提にした希望を捨て、死と併有する生の本来の意味を知る「死と再生」を歩むことです。二人の子どもと妻の死に直面

した西田幾多郎は「自力無功」として次のように述べています。

「深く己の無力なるを知り、己を棄てて、絶大の力に帰依する」

『西田幾多郎随筆集』「わが子の死」

人間は、自ら闇の部分を意識化することで、自分が本当の自分に成る、つまり自己の全体性を生きる(全き人間)事が可能となるのです。

(次号に続く)

#### ■神道と仏教の関係④

#### 7. 神道と仏教の関係性で見えるもの

日本神話は、仏教受容の過程における政治的産物であるにもかかわらず、これを公に認めようとせず、「日本古来」であるとか「ゆかしき伝統」として、いかにも日本の独自のな所産として嘘ぶる権力者の態度が、民衆レベルでのナショナリズムや尊皇思想につながり、戦争に向かっていったのです。

もし日本神話や日本文化の根底に渡来系民族が深く関わっていた史実や真実が広く知られていたら、アメリカに媚びながら、中国や韓国、北朝鮮を差別し、見下すような態度にはならなかったのではないでしょう。また、聖戦としながら、植民地化することもなかったのかもしれない。それは、同じ穴の貉であり、お互いを尊重しなければならぬ関係性が歴史上あったからです。

私達日本人の民族性には、表面には見えない「二分による優位性」と「支配者による服従」ならびに「清明心」や「禊祓」にみられる生理的嫌悪感により蓄積された「浄穢観念」が、はたらく続けています。

神事である相撲において問題になった女人禁制とは、女性を穢れとして扱った歴史を物語り、古代インドの支配者アーリア人のイデオロギーが、古代日本に伝わった根本的な差別観念の表出と言えるのです。

又、一般葬儀における亡き人に対して塩で祓う立場の傍観者は、死を他人事とし、亡き人を穢れた悪霊に仕立てる行為にも関わらず、非人道的な立場という自覚が全くありません。

これらの差別観念の記号化は、古来より政治的支配による観念として私たちの身心を蝕み続けています。日本人特有の差別心という意識はどのような繰り返し返されてきたのか。このスキーム（自動思考）問題に對峙するには、仏教の四苦八苦の五蘊盛苦（ごうんじょうく）で学ぶことができます。

五蘊とは、色（感覚）、受（感情・感性）、想（観念・思考）、行（意志・反応）、識（無意識）の五つの、私を構成する心の要素を示します。この五つの要素によって苦しみが繰り返されるといふ連鎖を、最後に説明したいと思います。

まず感覚的に他者に対し穢れを感じ取り（色）、嫌悪感を覚えます（受）。そして淨穢観念として（想）排除（スケープゴート：行）すなわち「祓<sup>はらい</sup>」として投影（注）するのです。この一連のはたらきが無意識に蓄積され排他的な精神性や差別心、清明心となり（識）、これが無意識に蓄積し、この識が元になって新たな差別心の活性化につながり、心の渦を巻き起こすのです。

この心の渦による差別心によって、苦しむ人と苦しめる側の人（傍観者）とが混在する相互的な社会性が常に身近にあり、エネルギーを

保持している為、止むことがありません。この社会現象は、いじめや虐待による痛みや死、パワーハラスメントによる疾患や自死、身内による殺人と同様に近隣諸国との争い等が示す通りです。

この五蘊のはたらきと原理は、ユングが示した「コンプレックス」（無意識中の感情によって引き起こされる表象群）に非常に似ています。ユングはこれを感情に彩られた心的複合体（感情・思考・意志・記憶・行動など）の無意識における自立性として説明しています。

河合隼雄は、投影の機制として生まれるコンプレックスについて「自分の内部にあるコンプレックスを認知することを避け、それを外部の何かに投影し、外的なものとして認知するのである」（『ユング心理学入門』）と説明しています。また河合は、コンプレックスにおける相反するものが強く存在すること（両価性）も指摘しているのです。

このように、我々の心の奥底に蓄積された五蘊盛苦の要素が複雑に絡み合い、心の渦として「祓<sup>はらい</sup>」行動に成り、はたらき続けていることが理解できます。このはたらきは、コンプレックスという執着の渦となつて大きく巻かれ、今に続く見えない苦しみを生んでいるのです。本来、この苦しみの成り立ちは、鈴木大拙が言う「情性的直覚」（コンプレックスによる執着心であり、「有情」（動物の範囲）でしかなく、幼児性に満ちた行為といふことに成ります）。

この日本人が投影し続けてきた結果がもたらす、見えない苦しみに對し、一度投影したものを戻す作業（投影のひきもとし：withdrawal of projection）こそが、気づきにつながり、仏教の示す自己の目覚め（「有覚」人間の範囲）と成るのです。（次号に続く）

(注) 投影

ユングによれば、投影とは「主観的な出来事を客体の中へ移し出すこと」を指しています。自己の内にある衝動や資質を否認し、自己防衛のために、他人に悪い面を押し付ける心のはたらきを意味します。

悪い面だけでなく良い面を投影することもあり、その対象がアイドルや政治家、為政者、宗教主宰者などに向けられます。投影された対象は、実物より過大評価され、自分自身もその対象と同一視され、同一化して、自己を過大評価することにつながるのです。

この両価性は、乳幼児期における自己愛の健全性と関係しており、母親との関係性も影響していると言われています。

このはたらきの特徴は、無意識に起こるものであり、自分では気づかずにコントロール出来ていないことです。

仏教では、親鸞聖人が七高僧として敬愛するインドの龍樹が「戲論(けろん)」として論じています。

### ●新年会の講座よりの抜粋「阿弥陀仏とはどんな仏様？」

阿弥陀仏という意味は、インドのアミターバ①とアミターユス②にブッダという原語に漢字の音を当てたもので、①はかり知れない光(智慧)と②無限のいのち(慈悲)に目覚めた者という意味になります。

また、目覚めた者はこの世でお釈迦様のみであるから、お釈迦様の人格、いのちを永遠に象徴化した対象が阿弥陀仏ということになります。

この為その姿は、「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり」(『唯身鈔文意』)とあるように、私たち人間には捉えることが出来ない、智慧と慈悲の象徴であり、理想的人格お釈迦様の悟りの世界、真如の象徴であるのです。

親鸞聖人は阿弥陀仏について、「無上仏と申すは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに、自然とは申すなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはもうさず。かたちもましまさぬやう

をしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききてならひて候ふ。弥陀仏は自然のやうをしらせん料なり」(『正像末和讃』)とあるように、阿弥陀仏は、智慧と慈悲の絶対なる真如の世界を知らせる為、自らをその姿、「様子」を知らせる為の「材料」(象徴)として顕現し、常に私たちにはたらき続けることに成ります。(自〓智慧、然〓慈悲、自然〓阿弥陀仏〓オノズカラシカラシム)

お釈迦様の説いた『仏説無量寿経』には、真如を言葉で顕す象徴として、阿弥陀仏が法蔵菩薩という菩薩の姿となって顕現し、誓願を立て、はかり知れない修行の後、阿弥陀仏となったとされています。

我々が真如の世界、悟りの世界を知りうるためには、法蔵菩薩が示した誓願を信じるのみ、そこに自己に目覚める世界が開かれていくということに成るのです。そしてこの誓願の要、阿弥陀仏の本質を示す内容が、他力本願なのです。

つまり、本願を成就した阿弥陀仏は、「私を信じ、私の名前を唱えれば、必ず往生する」とはたらき続け、いつも私と共にいる仏さまということに成るのです。

合掌

なもあみだぶつ



### ■西真寺 令和二年行事のご案内

村上門徒会同朋の会「聞法会」六月から十一月迄の毎月二十五日  
報恩講 十月十二日(月曜日) 十時より予定